

## 生霊譚は仏教説話なりや？

発表 井上真史

### ●女の生霊の事付タリよりつけの法力

著者不詳『諸国百物語』 一六七七

相模国に信久とて高家の人あり。

此奥方は土岐玄春といふ人の娘也。かくれなきびじんにて信久てうあひかぎりなし。

こしもとにときわといふ女あり。これも奥がたにおとらぬ女ばうなりければ、信久おりくかよひ給ふ。ときわはそれよりなをく奥がたによくほうこういたしける。

あるとき、奥がたうかくとわづらひ給ひて、しだひにきしよくおもりければ、信久ふしぎにおもひ、「もしは人のねたみもあるやらん」とて、たつとき僧をたのみてきとうをせられければ、僧経文をもつてかんがへて申しけるは、「此わづらひは人の生霊つき申したり。よりつけといふことをし給はゞ、そのぬしあらはれ申しべし」と云ふ。

信久きく給ひて、「よきやうに頼み申す」とありければ、僧十二三なる女をはだかにして身うちにはけ経をかき、両の手に御幣をもたせ、僧百廿人あつめて、法華経をよませ、病人のまくらもとに壇を飾り、らうそくを百廿丁とぼし、いろくのめいかうをたき、いきもつかずに経をよみれば、あんのごとくよりつきの十二三なる女口ばしりけるほどに、僧はなをくちからを多て経をよみければ、その時ときわ壇の上にたちいでたり。

僧のいわく、「まことのすがたをあらはせよ」との給へば、ときわもんひきつくるひ、うちかけをしていで、うへなる小袖をばつとしければ、百廿丁のらうそく一どきにきへるが、火のきゆると一度に奥がたもむなしくなり給ふ。

信久むねんにおもひかのとときわをひきいだし、奥がたのついぜんにとて牛さきにせられけると也。

### ●妬女妻を悩し念仏たちまち治す

椋梨一雪『新著聞集』一七四九

寛文のころ、阿州美馬郡貞光といふ所の、しぢらや某氏の家来七兵衛といふ者と、傍輩の栗といふ女と、夫婦の約束をせしに、又、其隣の娘を、人の媒にて、七兵衛妻にむかへし。

栗、此事を深く憤り、村つづきの井の脇村の薬師を祈り、仏の眼、耳、胸、三所まで釘を打ちけり。

然るに、七兵衛は恙なくて、妻にかの栗が生霊付いて、さまさま悩しける程に、山ぶしあまた集りて、祈り加持すれ共、さらに験しなかりし。

三年を経て、既に死すべき様にみへし比、脇村の東林寺周普に、此事を語りしかば、それこそいと安き事とて、病人の枕に依て、わか声に付いて念仏せよとて、十念授けたまへば、即座に脊軽くなりしとて、手を合せ、よろこびし。

さらには三日の間、精進して、随分念仏せよとて、血脈授けたまひしに、終には快気せり。

### ●松之助女の執心にて苦しむ事

伝阿『女人愛執怪異録 上巻』一七四〇

#### ① 導入

京都或商家の子に松之助とて十四歳になれる美童あり。すぐれて麗しく、見る人をはなちがたく、道にてあへる人、かへり見ざるはなかりき。

享保十四年酉の十一月五日より、あやしき病悩をうけぬ。

傍人つくくとみれば、恰も人有りて彼美童をせめつけ、髪をつかんでうしろへひきつけるやうにみえて、息あへぎくるしむこといはん方なし。母ははやく身まかり父老人してそだてけるが、此有様をみて、あはてさはぐ事限りなし。家内一族おどろきて、いかさまにも物の怪にてぞあるらんとて、針葉灸治品をつくし、神道僧徒の祈祷ころを砕きけれども、その験なければ、すべき様もなくして、あきれはて、看り居ける所に、智聞といへる僧分衛して、偶其家に至る。

亭主もとより相知れる人なれば悦んで請じいれ、まづ童子が病体を見せしむ。その時病童が云。

われ、沢、了象、海の二師に見えん事をおもふ。又般若のころをきかん事をねがふ。公幸によみ給へかし」と。

以上の二願、童が意に非ず。託たる靈のいはせるなり。

智聞即時香をたき、つつしんで理趣分をよまれるに、経の半に至りて病童しきりに感泣す。

(以下、教えに関する僧と靈の問答)

「抑仏性は仏に在つても増する事なく、凡夫に在つても減することなけれども、悟れるを仏といひ迷へるを衆生といふなり」

と示しければ、病童聞分たるけしきにて涙をながし、さて病苦もしづまりぬ。智聞辞して帰り、家内も安堵のおもひをはし居けるに、又病苦はなはだし。おどろひて僕を走らせしかば、智聞来たつて理趣分を読みければ、病悩又しづまりぬ。かくのごとく成事あまたたびなり。

## ② 二女憑

ある日又病苦しきりにして殆息絶なんとす。家内おどろきさはぎ、沢了の法符を乞、智聞を請じて読経せしめしかば、病悩又静まり、つかれて少ねむれる体に見へしが、傍人の目には人有て、病童が足を捉へて半間ばかりも脇へなげつけ、もとどりをつかんでふりまはす様に見へしが、病童くるしむ事はなはだし。その時智聞病童を押へ、呪を誦しながらなでられければ、劇苦漸く止みぬ。

智聞問て、「汝が眼に見ゆる物ありや」と。

病童云、「われねむらんとすれば、ゆりおこして、とかく苦しみまする者あり女人の声のみ聞こへてかたちは見へず」と。

智聞云「さらば汝、其者にいへ。智聞それが為に冥福を修すべし、童をなやます事なかれ」と。

病童おしへのごとくいひけるが、しばらくにして童が云、

「いまはじめて二人の女のわれをはさんと座するを見る。其一人は幽冥の人とみゆ。親族の婢女がやが顔色に似たり。今一人は此界の人とみゆ」と。

其時家族口々に、かれにてやあらん、それにてやあるらんと名をさしてとへば、童子答へんとしていふこと能はず。

家人筆をそめて童に与へければ、いかれる色あつて筆をもぎすつ。もの言わず筆を投げる靈の所為なり。

智聞又理趣分を読めば病悩又静まりぬ。其時、病童象海に見えん事をねがふ。父其まま使をはせて来儀を請。

師、使とつれて来る。父此程の有様をかたりければ、師、病童の傍にて誦経し、かつ法要をのべきかせ、三帰を授けられしかば、病童悦で聴受し、かたはらへ向つて人ともいふ体にみへしかど、傍人の耳にはさだかに聞分る事なし。

さて童が病悩夢の覚めたるごとくに快復せり。即ち十一月二十八日なり。父のよろこびは更なり。家族愁眉をひらきぬ。

智聞童子にいへらく、「病中のこと覚へたる限りをかたれ」と。

## ③ 口走りの記憶

童が云、

「はじめの程は、女の声のみ有て、来たりせむることたび／＼なれ共、その形ちをば見ず。ある日忽ちあやしき女人をみる。齡十七八ばかり、白き物を着、髪をみだし、眼は血をそぎたるごとく甚だいかれる気色にて、『我いかなる悪縁にや、いつしかおもひかけ侍りて、忍びがたき余りに、折をうかゞひ二度三度なげき聞え候へども、君一言のかたじけなき御答もなきゆへに、遣る方もなき物おもひにむねふさがり、近き比身まかり侍るはひとへに君が情けなきゆへなり。此恨いつの世にかは忘れん』とて、怒りのゝしる時もあり、つかみつく折もあり。(これは一家得能作兵衛が婢女かや也。当月三日十七才にて死す。)

又側に一人の処女あり。十五六歳とばかり見へて、容色甚だ麗し。我その名をとへどもそれは答へずして、『われ君が有様を見初めまいらせしより、愛執の情忍びがたくて来たれり』といふ。

われ問、『さては身まかりたまふ人にて侍るや』と。

かれ答へて云、『さにはあらず』と。

『然らばいつの比にか有りけん、清水のほとりなるその家へ来たれかし、ひそかに相見へたしと文していひおこせたりし人か』と問へば、

『それにて侍るなり。必ずしもわが名を洩らし玉ふ事なかれ』といふ。去りし日かれかそれかと名をとはれし時、我いはんとすれば、かれ手を以てわが口をおゝひ、紙にかゝせんとせしかば、かれ筆を奪ひて捨てつ。われつかれて眠らんとすれば、妖女わが魂を奪ひて同穴にせんと罵るその時、処女ゐかりていふ、『われ良童と偕老の交わりをなさんとおもふ。何そ汝がまゝにせんや』と、二女たがひにあらけなきことばをはき、相打つありさま怖ろしき事いはん方なし。それより後は妖女はしばらくわが傍をはなれず、処女は時々来たれり。智聞重ねて般若を読玉ふ時、二女ともにすこぶる領解せる体に見へぬ。

妖女の云、『正直慈愛のこゝろにて深妙の般若をよみたまふ故に、われら法益を蒙る事、はか

\*1『往生要集倭解』の澤了(真宗僧)のことか?

\*2象海惠譚(1682-1733)。臨濟宗。東福寺、南禅寺に招かれる。

りなし。なんぞ同じ般若なれども読人の心地に依つて利益かくまで異なるや』と感嘆して悦びぬ。前に真言師来て理趣分を読、ただ撥遣の心地のみに住せしに、靈、童に託して却ておかりぬ。今聞師は靈の幽妄をあはれみ、得脱せしめんとの心地にて理趣分を読むゆへにかくいふならん。『さてわが法名を光白貞蓮といふ。君、智聞に乞ふていよく冥路を助けよ』と。

その後は二女の妬情氷のごとくとけてむつまじき事、姉妹に異ならず。妖女悦んでいふ、『はからざりき、法潤を請けるがゆへに未来は女身を脱すべし』と。

処女が云、『深般若の妙理をきく。此生にて女身を脱せん事かたらじ』と。

さて又海師の誦経を聞、三帰をうけ、

因愛欲過患三界輪廻如旋火汲井輪等の勸化におよんで、感涙にせきあへずして、処女が云、『われ今まさに去るべし。君三十歳に至らずんば婚姻する事なかれ。又わが名を頭はす事なかれ。此二事したがはゞ害有るべし』といひておはつて消へうせぬ。

妖女が云、『われ愛欲によつて身をほろぼせしは悲しむにたへたりといへども、此逆縁に依て深法の利益を蒙る事、何の幸の是にしかん。さて処女が婚姻の期をいへる事は、かれ尚恋惜の情あればなり。君もしめとらばかれが名を書きて、そのまゝ引きさきて、門戸に釘にて打付よ。何の害かあらん。我今帰り去るべし』とて、頭の方より消へうせぬ。

智聞云、「われ般若を読みしとき、汝真如の名義を問ひし事を記憶せりや」

童が云、「われすべて知らず。妖女の所為なるべし」と。

#### ④ 霊再び

同二十九日、父東福寺に詣して海師に謝し、齋食をいとなみて、五十余僧を供養し、妖女が追福に擬す。其夜、童が夢に妖女また来たりて云、「われ法輪に乗じて只今善所生ず。これ偏に君が賜なり」と云ひて去る。是をみれば尼の形となり、白き服を着、雲を踏み、西に向かひて飛行ぬ。

明けぬれば享保十五かのへ戌の年、正月六日の夜、童、炉によつて居けるに、旧冬の処女来たつて云、

「われ般若の法味を餐し、知識の教化を蒙り、愛欲の念は止ぬれども、久しく胸中鬱結せしが病根となり、心身ともにつかれはて、薬術も験なく、先月二十三日つめに命終して、法名を意心妙林と云ふ。今中有の生をうけぬ。願わくは、君、智聞に乞ふて尚又般若を読誦せしめ、冥福を修し給はれかし」

とねんごろに打頼みてさりぬ。

童子心得ぬとは諾しけれども、年のはじめ事しげくて未だ智聞にも告ざりけるに、同二十一日の午刻ばかりに、童子しきりに振るひ付きて、容体、旧冬、靈の来たり時の如くなれば、合家おどろき集まりて看護し、智聞へも使をつかはしければ、智聞又来たりぬ。是より後は童が言語所作悉く靈の所為なり。

#### ⑤ 幽霊問答

童、亭主に問ふて云、「公は童が父にてましますや。はづかしながら、われ愛欲のこゝろにて童子を悩まし侍りけるに、はからざりき、般若の法益に預り、二師の開化を蒙りて、男女の相を忘れ愛執の情解けぬ。二師へ此謝礼述べはれかし」

と頼みければ、父其まゝの旨を聞師に告げぬ。

聞師、童に向かつて、「汝、仏前に向かひ礼拝せよ」と申されしかば、童、つつしんで三拝す。次に智聞を拝しぬ。

智聞云、「汝去冬父の家に病臥して、魂は此家に来る事たび／＼なり。その往還を覚へたるや」と。

童が云、「父の家に臥しては、夢の醒めたるが如く、此の家に来るは夢中のごとし。来ると還るとは覚へ候はず。魂此家に来たる時は、父が家にて、看病する者はわれ熟眠すと見るばかりなり。さて、二師の法益を蒙りて、愛執は尽きぬれども、心身ともによはりて前後をしらず成ぬ。ある日、わが身の床に臥すを見て、体中へ入らんとすれども叶わず」

(以下略、智聞と幽霊(元生霊)の問答が続く。葬式の様子、供物を供えたら霊魂に届くのか、供えた水はいかにして届くのか、あの世に昼夜はあるか、あの世に東西はあるか、霊魂は清水寺誓願寺等の仏閣に詣ることがあるか、下方角もわからないからいくはずもない、霊はどこから人に憑くのか、親指あるいは毛穴あるいは口など)

問問「旧冬、汝はなれ去るに至つて、姻期をいひしは何ゆへぞ」

答へて、「**それなを愛執の余波と推したまへ。今われ何ぞ其心あらんや。**さて童をねむらしめよ。其熟眠せる時に我離去るべし」と。

時に智聞と介抱の者と童を撫していねしむ。

翌朝辰の刻に、欠伸して覚めたり。智聞昨夜の諸事を問ふに、「処女来たりし事は幽に覚へぬれども、其余はわれ知る事なし」と。

智聞仏前に香火備へ、読誦回向してかつ袈裟を靈に授けて、「是は三世諸仏解脱幢相の衣なり。今われ汝に授与す。よく護持して仏果に至らんと誓ふべし」と。

以下略。その日の夜松之助の夢に尼の姿となつた母と二人の靈が現れ「共に女身を脱して善所の生を感ず」と礼をいって去る。

⑥ 著者評

最後に著者の評。一部抜粋

「古今希有の一恠事なり。まのあたり見聞せし人に聞きて、ほぼ梗概を記すのみ。松之助が父の名も所住の町も慥かにしれ侍れども、わざとこゝに洩らしぬ。処女とは縁にもつくべき年ごろの女のいまだ嫁せざるをいふ。妖女とはあやしき死霊のことをいふ。つねにいふゆうれいの事なり。中略

生有者愛執の念なきといふはなけれども、今この二女がごとき生霊死霊一人を愛執して、同じ家に現じ来たりて、言葉にていさかひ、手にて相打ちし事、古今未曾有の奇怪なり。」

● 松任屋幽霊の事 神沢杜口『翁草』一七九二

享保十四五年の頃、京都の松任屋徳兵衛と云ふ問屋に、松之助とて十四五歳の男子有り。

さのみ美質と云ふにもあらねども、宿因の成る処か、女の執着を受ける性にて、其辺小女兩人しつ心なく、松之助に恋ひ忍て、既に二人が霊松之助につきて、或時は呵責に逢ふに如く、宙に引はられ、釣上げられ、両女がこはねにて恨かこち、嫉妬の問答など目前に在がごとく、唯形はなくて、松之助が口を借りてしやべる計なり。

是に悩まされ、松之助心地煩はしく、色青さめ、病ふの床に臥す。二親悲しみて、其頃千僧供養を遂げられし象海和尚を招じて、祈加持を頼むるにより、象海色々教化せらる。始は駈も薄かりしが、次第に帰伏して、和らぐ様なれども、月をかさねて退かず。兎角する内に、一人の娘は果てぬ。霊は其儘立さらで、和尚并なほびに弟子聞首座（割注 今壬生村新徳寺に有る天巖和尚是なり。）への問答いと哀なる事共なり。

我はこの世を去りぬと覺て我が浅ましき形、自らの目に遮り、二親の嘆きを見るにつけ、いと悲しく侍るなど、語る。

或時は和尚のおはせし儘、早々迎出よと呼べども、松之助出ず、やゝ有て出るゆえ、など遅かりしぞと尋ねれば、余り取り乱したるさま故、着替えて出ぬと云。其小袖を問へば、何色にて模様は何なりと云へども、姿は見へず。娘の親は貧敷者にて、近き辺りなれば、斯様の咄迄も、一々聞きて、其小袖は重宝致せし小袖なりとて嘆き臥せぬ。

斯してやゝ示しを請けて、両女が霊も難有き功力に引かれ、和尚并聞首座へ、暇乞ひして立去る。其後は再び来らず。松之助も快気して元々通に成ぬ。

其頃都鄙とひに専ら此沙汰有て、松任屋が方へ人群りて是を見聞す。

徳兵衛難儀に思ひて、色々制止すれ共用ひばこそ、理不尽に家内へ人押込み、取り／＼批判をなす事市の如し。以下略

生霊譚 つまみ喰い

● 先妻後妻に喰ひ付きし事

高古堂『新説百物語』一七六七

江府何町とやらいゝける所に老人のあら物やありける。

妻をむかへて二三年にもなりたりけるが、又外に手かけをかこひて半年ばかりも過ぎて本妻をうるさく思ひ、何ぞとして離縁したく思ひけれども、いゝ出すべきをりもなく、見おとしたる事もなければ、つく／＼と思案をめぐらし、我内の金銀をしだいにへらし、諸道具など売しるなし、次第に貧になりたる様子に似せて、あるとき妻にむかひて、「かくの如く渡世にゆだんなくかせげども、手まはしあしくなりたり。我が身もひとまず奉公にてもいたしみるとおもふなり。御身もしばらくやしきにつとめにもいたさるべし。なにとぞ末にては又々一所にくらさん」と、まことしやかにかたりける。女房つく／＼是れを聞きて、是非もなき事とおもひ、人を頼みあるやしきかたの物逢奉公に出でたりける。さだめてあとにておつとも手代奉公にてもいたさるべしとおもひくらしけるが、一月たてどもたよりもなく、二月たてどもおとづれもなかりけるが、ある時御共にくはへられて湯島の天神へまいりけるが、先に住みける町を通りしに、先に住みなれし家は今にては何方の人の住みけるやらむ。又何店にかあらむと見ければ、やはり前の通りののうれんをかけ、我がおつと店に帳をつけて居たりける。内より若き女、茶わんを持ち出でて差し出しけるを、つとうけ取りてのみたりける。是れはいかにもふしぎなる事かなとおもひけるより、心もすまず行きもどりの御ともにも物をもいはず、思案がほにてありしかば、傍輩もなにの心にもつかず、「心にてもあしきや」とたづねしかば、「いかにも心持ちあしく」とて、帰りてもすぐに打ちふし居けるが、夜る／＼はおそはるゝやうにうめき、夜あくれば、何のかはりたる事もなし。四五日にもなりていよ／＼夜の内はさはがしく、昼は物をもいはずして伏し居たり。ある夜、夜中過ぎに殊の外さはがしくありけるゆへ、皆々打ちよりに部屋にゆき見たりければ、正気をうしなひて右の手に女の髪を百筋ばかりにぎりて死し居たり。水などのませかいほういたしければ、息出てよみかへりたり。又そのあすの夜は宵のうちよりくるひにはしりけるが、かん病の傍輩もくたびれふしけるが、八つ頃にいたりて身の毛もよだちてさはがしかりけるに、皆々目をさまして見ければ、此度は口のはたは血まみれになり、顔もおそろしく絶死したり。いろ／＼とかいほうしてよみかへり、そのまゝ夜中ながら肝入りのかたへ送りかへされし。そのゝちきけば、あら物やの後妻は夜分ねたりける折に、あやしき女来たりて喰ひころされしとうわさしける。そのほうはい京へ帰りて語り侍る。

生霊対死霊

● 生霊の心得違

平秩東作『怪談老の杖』一七五〇年代

世に死霊の生たる人に取りつきしはあれど、爰にめづらしき物語あり。生たる人死人にとりつきた

りといふは、此物語なるべし。

戸田家の家中なりしと聞り。ある侍、妻におかれて、又後妻を迎へけるが、随分挨拶柄もよく、波風なく暮しける。ある土用ぼしをしたりしに、歌書などの写したる、又かきすてし反古、詠み歌などの詠草のよくみつゝみたるなど出でけり。女筆にてことにうつくしくかきせなり。

後妻夫に尋ねけるは、「是は何人の書給ひしにや、扱も／＼かはゆらしき筆のすきみかな」と、目もれもせずながめけるを、「それは十二日の仏の字なり。よからぬものを出し給へり」とて取あげける。十二日は先妻の妻の命日也。

つまいふ様は、「扱もかく手跡といひ志しといひ、さだめてわらはが心よかるまじきと思召て御物語なきものならん。扱も／＼世にはかやうなるはつめいなる女中もあるに、わたくしなどかやうにかたくなものは、御心にもいらぬはづなり」など、たはぶれのやうにいひけるが、そのけしき露もねためる様子なく、誠に亡妻の手跡をおもひ入たるさまなり。

その夜闈に入りても、妻の方より昼の事いひ出して、「さても前の御新造さまは賢女なるべし。さぞ何か御しほらしかりし御はなしもあるべし、きかせ給へ」など、うらなく云ひかけられて、日頃心には絶たざれども、後妻にむかひ云ひ出すべき筋もあらねば、心ひとつむかしを忍び過し来りしを、かく後のつまの心ありていふ一言に、おもはず口をむしられて、「かくいへばいかゞなれど、ことの外おとなしき生まれにて、何事も立ち入らぬさまにもはちして、うち見るにはいとおろかなる様にて、手かき、歌よみ、茶の湯などいふ事まで心得ぬ事なく、しかもいさゝかそのけはひみせし事なく、歌など書たる時行かゝりても、ふかくかくして、顔うちあかめありけるまゝに、さぞかし手前細工にてよみ習ひらん歌、さぞあるべし、なまじゐに見あらはしてはぢがはしくおもはせんなき事とおもひて、見ずにやみし事度々なるが、死してのち、はこのそこにかきおける詠草などをみれば、いにしへの作者にもおとらず、世にありし時是をすれば、よき友ひとりまうけし心地すべきを、残りおほき事なり。さてかくよき事に才覚なる計にあらず。朝夕の家のさめ方つゞまやかにて、三味せん、浄瑠璃のばさら事などは夢にもしらず、只けんやくしつそを本として、召使ふものにもなさけふかく、細工は何にてもしたり。料理も、同役などの夜ばなしなどに、ちよとした吸物などにも、手をうたせる程の事にてありし。しかし色めきしかたはなくて、平生我らきのつまる様なる生まれなりしが、いかなる事には、かりふしにいひけるやうは、『わたくし此世になくなり候とも、もはやこと人をむかへ給ふ事はかならず／＼被成まじ。もし左様なる事なされ候はゞ御恨申べし』などといひしが、是ばかりは氣質とは相違して、みれんなる事をいひしと、いまにおもへり。

その外は、夫婦の中にもも礼儀たゞしく、われら酒などのめば度々いけんしたり、そなたと同じ事にて下戸にてありしが、芝居は嫌ひなるは、またそなたとは違ひし所もあり」など、いひ出してはとめどもなく、我を忘れてもの語りせしをきゝ居たりしが、女房ためいきをほつとつきて、何とやら風なみあしくなりければ、それよと心づきて、外のはなしにまぎらしぬ。

そのうち、ふと風の心ちとて打ふしてより、次第におもり、食事すゝまず、只やせにやせける。医師も気の方なりといひ、見分も気病とみへれば、さとは浜町なれば、時分柄屋形舟などもおほく行かふに、保養の為とて舅の方へ出しけるが、次第に病気おもりければ、心ならずあんじありける折ふし、且那寺深川の錠満寺といふ禅寺より使僧あり。

和尚の手紙とてさし出すをみれば、自筆にて「ちと密々に御目にかゝりたき事候間、今日中御出」との文言なり。

幸非番なれば出行きしに、和尚下間へまねきいはれるは

「今日申入れし事は別儀にてもなし、此間毎夜卵塔へ光り物とび来候にて、墓処のうちへ落ち候由、寺僧共申に付、昨夜卵塔に相まち、拙僧直にためしみ候へば、成程人魂ともいふべき光りものとび来りて、そこ元御亡妻の墓所の上にて消え候と、はか内どろ／＼となり候事しばしの間に、またかの光り飛び出て返り候。尤一夜の内二度程まいるときあり。まづ一度はかけ不アマリフシギニレ申。あまりふしぎに存候間、そと貴様へ御咄申すなり。何ぞ思召あたりなく候や」

と問ければ、しばらく思索して、

「それは何方より」と問へば、「まづ河より西の方と存候」といふ。

「扱々驚入候。尤貴僧様の御ことばを疑ひ申にてはなく候へども、今晚にも、私今一応相糺し度」といひければ、

「御尤もなる事なり、宵より御こしありて御談あるべし、出申さぬとても、愚僧いつはりを申すべき道理なし、かならず御越あるべし」

と約して帰り、とかくはからひて、暮六ツ過より宿を出、深川の且那寺へ行ぬ。

和尚よりも、「同宿にても差しおくべし」といはれけれども、存よりあればとて、只一人しきものをしきて、夜の更るをまちけるに、九ツの鐘なるより、「すは時刻ぞ」と片づをのみ守り居けるに、光はつと飛来りて、墓の上にてきゆるとひとしく、墓のうち土中なりさはぎて、ごと／＼どろ／＼と、人などのくみあふ様なる音するにぞ、こはあやしやと身がまへして待かけけるに、一とき計すぎて、土中よりまた火の玉とび出るを待まうけて、まつふたつにと切付ければ、手ごたへして火は消へうせぬ。

妖怪の所為なるべしと、月影にそこらあたりを尋ねけれど、何もなし。刀をみればのりつきたり。

「あかたがた」ふしんはれねど、寺僧へ断り、

「成程相違なき段見届申たり。拙者は屋敷へ罷帰まかりかへり候間、また／＼かはる事あらば御人被下しべし」とて、

いそぎやどへ帰られ、とくと思索して見けれども、合点ゆかず、心をいため居る処へ、

「はま町より使来たり」といふ間、心ならず立出、

「病人はいかゞあるぞ」と尋ねければ、

「御かはりもなし」といふ。  
まづ安堵して書状をみれば、

「密申し送候、吟味殊の外とりつめ候間、いそぎ御越」との文体。

驚き、さつそく頭へ届けて見舞れければ、はやしうとめなどはなきたをれ、召仕ひの女なども、みななみだを目にもちて居るにぞ、

はや埒は明たりとおもひて、奥へ通りければ、あるじ一ト間へよびて、

「扱吟事も養生相かなはず、相はてたり。夫につき、何とも合点ゆかざる臨終ゆへ、早速貴殿を呼よせたり。昨日はいつ／＼よりも少快く候ひしが、例のごとく四ツ過より正体なく寝入り、我々も少々まどろみしに、八ツ時分ともふ頃、あつとおそはるゝ様にてありし間、さつそく立よりてみれば、あへなく事きたり。その体甚以ていはなはなもつてあやし。先是を見給へ」

とて、夜着をとりみせられければ、後のかたさきより胸板へかけて、切つけたる刀きづなり。夫も黙然とさしうつむき、しばし思案しけるが、

「なる程けうなる義なり、夫(それ)には夜前ヶ様(かやう)々々の次第あり。定て妻が嫉妬の心より、たましゐ身をさりて、妖怪をなせしなるべし。以の外の義なり。扱々不憫の次第なり。後悔くやみて帰らず」

と語られけるにぞ。

舅も我ををりて菩提所へも其趣相たのみはふりもらひ、跡をば念比にとぶらひけるといへり。  
享保七年の事なり。

生霊対狐

### ●女の念力夢中の高名

鳥醉雅『新選百物語』一七六八推定

よつ引いてひやうと射る、其矢すなはち巖にたちしも孝の一念、子の親を思ふは天の道なれども、彼を見これを聞につけても、親の子を思ふほどにはなきものぞと、枕引き寄せ、地をはしる獣そらをかける翼まで、親子のわかれと藤戸の曲(くせ)舞(まい)をやりかけし折から、御在宿かといふ聲は、不断聞なれし甚蔵どの、

「サアお通り、珍しいはなし、昨日立玄老に聞きました。誰ぞがなと待ちし所、さいはいの御来駕、イザおたばこ、節句まへもちかひが、定めてよろしき仕廻ひならん」といふに、甚蔵かしらを掻き、

「神佛を頼みても去と運は来ねばこぬもの、なかさ埒はあきませぬ」といふをうち消、

「それは心のぐれつくゆへ、何事も一心にいのらば、なか成就せざらん。きのふの嘶も一心から、餘りでどぶやら虚言らしいけれど、直に見たとの傳(つて)ばなし」

今はむかし、上野の国天王村とかやいふ所に、長井玄順とて、本道外科を相兼たる医者ありて、一子の名を玄的いひけるが、此所に伽藍跡といふ所ありて、櫻四方に咲みだれ、散りもせず咲も残らぬ最中なれば、ある日藤田大助といふ浪人の嫡子、幸内といふ人を同道にて伽藍跡へ行けるに、昼すぎまで幸内は用事ありて、玄的とわかれ先へ帰りぬ。玄的はあとに残り、暮にいたれど帰らざれば、玄順夫婦は待ちかねて幸内かたへ人をつかはし、

「玄的はまだ宿に帰らず。今日其元わかれ玉ふ、いづかたにて有りしや」と尋ねにあづかり、幸内たち出、

「経堂のほとりにて御わかれ申せしが、西の門にて見かへれば、はやいづちへか行玉ひし、御姿はみへざりし」

と返答聞きて、玄順夫婦それ尋ねよと、家僕にいひ付、残る方なく尋ぬれども、人音とても聞こへねば、初夜まへにたち帰り、

「伽藍跡はいふに及ばず、御知音が隣郷まで残る方なく尋ぬれども御行方しれがたし」

と息つきあへず告げれば、夫婦は大に驚きて、

「これたゞ事と思はれず、まづ法印へ占わせ、方角もとめて尋ねん」

と、夫婦うち連れはしりゆき、法印に對面し、今朝よりの始終の様子つぶさに語れば、法印うなづき、梅花心易掌中指南、八卦大全をとり出し、さし俯いて、しばらく考へ、はつと計に手を打て、

「一大事／＼、玄的老今日は終命の卦にあたり。火性の生まれ火克金の事なれば、剣難には気づかひなし。恐るべくは水難なり。夜半は子の刻、坎(かん)中(ちゆう)連(れん)の卦にあれば水克火の慎みあり。四つ半までに出でざれば一命のほど覚束なし。時いま戌の上刻なれば、しだひに水に

ちかよるべし。戌亥のかたを尋ねて見玉へ、十が九つ狐の所為」

と詞はなつて占へば、玄順夫婦とほうにくれ、涙かた手に庄屋へ訴へ、村中たのみて人やとひ、尋ねて見れども死骸も出ず、夜もしら／＼と明わたれば、玄順夫婦は狂氣のごとく、行きつ帰りつ見めぐる折しも、誰いふとなく、

「千歳池に玄的老の草履が片足」

と聞と皆々池に飛入、上を下をと探せ共、これぞと思ふ者もなく、いかゞはせんといふ所に、

「鼈井戸にもまた片足」といふに、人々さし覗けば、実に詞にちがひなく、さかさまに陥つてあへなくなりし。

死骸を取り上げ薬を用ひ灸治をすれども、響にさ／＼やく／＼とくなれば、二人の親は人目も恥ず聲をあげ、いだつき、泣どさけべどその甲斐もなきをあきらめ、玄順は宿に帰りて葬送し、野辺の煙となしけるが、女こゝろの解やらぬ、母親は食事もせず一間の中へ引きこもり、なげきくらし泣あかし、

「おのれ敵をとらでは」

と、罵り怒り正体なければ、玄順はさま／＼に諫めてみれども聞きいれざりしが、四五日すぎて、

夜半まで内儀は大に魘(おそ)はれて、傍にありあふ硯(い)はこ、文庫きせるに至るまで、手にあたるを幸にうちわり投うち、近所に響く騒動に玄順も夢さめて、

「このごろ愁歎(う)へ、勞(つ)かれに夢ばし見つるか」

と引とむればふりはなち、猶々募るその有さま、ふすま障子に掴みつき、

「あらうれしや」

といふかと思へば、横にころりの高野。玄順も興をさまし、

「多くの寝言を聞きたれども、かくすさまじきは今日がはじめ、起(こ)してみん」

と紙燭に火をつけ、傍に立ちより顔をながめて、是はいかに、くちわきより頬ぎわ迄一圓に血まみれなれば、

「扱(あ)は最前寝言のうち舌をくひしか、痛はしや」

と引おこし疵を見れども、舌にも別条あらざれば、どふかこふかと不審の所に、内儀は夢を思ひ出し、夫にむかひ聲をひそめ、

「最前とろ／＼眠る夢に、伽藍跡の東の堤に仇の狐が居ると聞きて、おのれ生ては置まじと走り行て、狐に抱きつき、組(く)づころびつしたりしが、狐も命のかぎりなれば、逃げん／＼ともがきしを、折(お)ふし刃は持あはず、狐の吭(ふえ)に咀(く)みつきて、念(ね)なう殺して、ア(う)うれしやと思ふ所を起(こ)されし。此血のつきしはたしかに正夢。東の堤を見玉(へ)」

と語れば、玄順合点はゆかねど、また血のつきしも不思議なれば、堤をさして急ぎ行見れば、年ふる古狐、吭(く)はれて死したりしと。

女の念力岩をも通す。これを聞いても甚蔵どの、随分御精を出されませい。

袖を殺したのは生霊か死霊か？

### ●吉備津の釜 上田秋成『雨月物語』一七七六

正太郎が妻の磯良をだまして妾の袖と逃げ、荒井の彦六の元に身を寄せる場面から

ここに播磨の国の印南郡荒井の里に、彦六といふ男あり。渠(かれ)は袖とちかき従弟の因あれば、先ずこれを訪(と)ぶ(う)て、しばらく足を休めける。彦六、正太郎にむかひて、京なりとて人ごとにたのもしくもあらじ。ここに駐(ま)まれよ。一飯をわけて、ともに過活のはかりごとあらんと、たのみある詞に心おちあて、ここに住むべきに定めける。彦六、我が住むとなりなる破屋をかりて住ましめ、友得たりと悦びけり。

しかるに袖、風のこ(こ)ちといひしが、何となく悩み出でて、鬼化(もののけ)のやうに狂はしげれば、ここに來たりて幾日もあらず、此の禍に係る悲しさに、みづからも食さへわすれて抱き扶くれども、

只首のみ泣きて、胸窮(むねせま)り堪(た)へがたげに、さむれば常にかはるともなし。窮鬼(いきすだま)といふものにや、古郷に捨てし人のもしやと独(ひとり)むね苦し。

彦六これを諫めて、いかでさる事のあらん。疫(い)といふものの悩ましきはあまた見來たりぬ。熱き心少しさめたらんには、夢わすれたるやうなるべしと、やすげにいふぞたのみなる。

看(みる)々露(つゆ)はかりのしるしもなく、七日にして空しくなりぬ。天を仰ぎ、地を敲きて哭悲しみ、ともにもと物狂はしきを、ささまといひ和(な)ぐ(さ)めて、かくはとて遂に、曠野の烟となしはてぬ。骨をひろひ塚を築きて塔婆を営み、僧を迎へて菩提のことねん／＼に弔ひける。

磯良の怨霊に脅され相談に訪れた際の陰陽師の台詞

陰陽師占(う)べ考(か)へていふ。「災(わざ)すでに窮(せま)りて易(やす)からず。さきに女の命をうばひ、怨猶(う)らみなおつきず。足下(そ)この命も且(また)夕(あ)さ(ゆう)にせまる。この鬼世をさりぬるは七日前なれば、今日より四十二日間、戸を閉(と)めておもき物齋(う)すべし。」

### ちくま学芸文庫版『雨月物語』 高田衛・稲田篤信 校注

このあたりは、『源氏物語』「葵」の巻の用語の引用が目立つが、趣向としては六条の近くの廃院で夕顔と源氏が愛欲にふけり、その夜六条御息所の生霊のしわざで、夕顔がはかなく死んでしまうという、「夕顔」の巻の趣向が取られていると早くから指摘されている。

それは「鬼化」や「窮鬼」という用字も傍証となつて、認めてよい説と思われる。「もののけ」はふつう「物怪」と表記される。「いきすだま」は「生霊」である。そのもののけを「鬼化」とした時、秋成は死病の床にあつた磯良の鬼化←悪霊化を示唆していた。それをうけるいきすだまは、当然「生霊」ではなく、『遊仙窟』『和名抄』で知られる用字「窮鬼」でなくてはならなかったのだ。用字の一つ一つにも秋成は細かい配慮をしているわけだ。

同時に、それを示唆にとどめて、「窮鬼といふものにや、故郷に捨し人のもしや」と正太郎の疑心暗鬼、また「独(ひとり)むね苦し」という懊惱(あう)を書くところに、秋成の巧妙さがある。それは彦六の無神経さと対照され、妻を裏切った男の心の咎めを書いて見事である。

### ●妓女の不貞淑

大郷良則『道聴塗説』 底本『鼠璞十種』国書刊行会 一九一六

新吉原江戸町二丁目和泉屋平左衛門が抱の泉川は、全盛の名高く、これが為(ため)に心を悩まし身を喪ふ輩(たぐ)多し。

それが中に、或大寺の住持(しやうぢ)ひたすらに懸想(けんさう)し、夜となく昼となく行き通ひけるが、泉川いささか



心に染まず、いとつれなくもてなしけれども、和尚は更に厭ふ色なかりけり。泉川はいかにもして遠ざけばやと計策を廻し、今迄遣ひし金銀も莫大なれば、今はあまりもあるまじと推量し、大晦日の朝急に文書で、只今難レ 遁入用候まゝ金子百兩御貸し給はれと申遣しける。

やがて昼過る程和尚来たり、約束のごとく金子百兩持来て興ぬ。かゝりければ此一策空しくなり、此上は兎やせん角と思ひ煩ひ、或験者を頼みて足留の折袴をなさしめける。果たして其しるしや有けん、一日(あるひ)和尚来たりてさめくくと打泣、「今は契も是迄なり、扱も悲しき事ぞかし、我は本出家に有まじき君が一日の情に引かされ破戒となり、借財はいふに及ばず、寺の諸道具什物迄悉く売代なし、今は檀家も免しくれず、江戸の住居もなりかね、遠く伊豆国へ引籠もるなり。さすれば君がおもかげをいつか又見ん事よ」

と、くりかへしく泣口説、別を惜しみつつ立ち去りぬ、泉川は嬉しき事に思ひ、それより程なく己が情人に身を任せける。

去年夏の頃より不圓病の床に臥し、医療も効験なく日々に重りければ、いかなる祟にもやと、巫覡を請じて梓に掛けるに、おそろしや伊豆の和尚が生霊に疑なし。さらばとてよけ祈禱に多くの財を費やしけるが、露ばかりも其効なし、「これは必強面かりし事又は金銀を費やせしを怨めしとはならず、今かく遠国に住みて逢見ん事も難ければ、朝の雲夕の雨の折々に付いて、恋慕の一念日頃に十倍し、遣方なきあまりに、其思ひのかくはなり給ふなり」

と、巫女は言たりけり。かくて昨日今日と疲れ衰へ、八月の末つかたといふに空しくなりぬ。其菩提所とて三田小山長久寺に葬りける。晩世の澆風、破戒の僧は是非もなし、いかに河竹の身なりとも、此妓女の不貞不淑悪むべし。其終わりを保たざる事当然といふべし。

### ●二宮久大夫、槍をもろふ事

椋梨一雪『古今大著聞集』一六八四?

阿州二ノ宮久大夫、薩摩かたへ使いに下りしに、日向国に至りて行暮ぬ。

宿を求るに、所の法令也とて、借ささりし、せん方なくて、よしや一夜は野にも寝よかし、とて出行けるに、或家より呼かへし。

「所の法度にて侍れと、余り笑止におはする、一夜を明けさせ給へ。」

と、まめやかに物し出て、

「見参に入申侍れと、病人にて、おはしませは力なし、是へ入せ給へ、逢たてまつり、都あたりのことなど、きかまほしく侍る」

と、しひて、いひしかは、心にまかせて行きて見るに、色青さめたる男、蒲団高くかさね、夜の物、身にまとひ、苦げに息つき、

「今宵の御宿まいらせ候事、且は、御為、且は、身の為を思ふにてこそ侍れ。我病の程など見せてたてまつり、かうやうのためしも有りて、療治せしことも侍るや、承たき事におわしけれ」

とて、首筋に巻たる絹をとれば、細き蛇二筋、首をまとひ、頭をならへ、目をほちほちとして、いふせかり事、又類ひなし。

「かかる煩ひ有といふ事、聞も及されば、増て見たる事は侍らす」

と云、傍に、二八には一つ二つ余れるかと見へし女二人、双六を打居たりし。

「此蛇は、ここなる女の執心にや、独り怒る事侍れは一筋しめ、二人腹立ことあれば二筋しむるにこそ侍れ。其ときは息も絶侍ると、おもへるなり。これにて終には果てなん口惜しさよ、今宵は、めつらか成御宿仕ふまつりし、皿の事に侍れ、其その道具」

といへは、槍をもて来たりし。

「是はかましき申ことに侍れとも、某か家に持伝て、手柄を顕せし道具に侍り。是をかたみに、たてまつり参らせ侍るぞ。思ひ出さるる折ふしは、一遍の御回向を頼み奉るにこそ扱は、あすはとく立せ給はんする」

「さもあらは、やかて、のほり給ふ時こそあら」

と、むつまじう、いとまこひして別れぬ。

薩摩にくたり、使を勤めて、登りに立寄て、礼をいわんするそとて、いそぎ彼所に至りて見れば、家と思しき所も、大き成淵に成。訝しく思ひ、里人にとへは、

されは、其宿めし給ひし後、三日経て、此所、地震雨風ひとかたならず、今は、世も扱とこそ思ひつれ、雨もやミ、夜も明けて見れば、其御屋敷、残所なく淵に成、家に有りし男女、一人も生きたるはなし。と語りて、力なく帰登。其くれし槍を今に持伝へて侍る。

### ●嫉妬ふかき父の妾

森田盛昌『咄隨筆』一七二六頃

松田六郎兵衛殿亡父四郎右衛門殿召任はれし妾まきと言者、母の如く尊敬せられて、奥方婚禮の時節より長屋の端に部屋を構へ、不自由ならざる様に指置かれし。いか成る心入にかありけん、奥方へ嫉妬深く、折節は形を顕し、奥方の髪をくひ切りなどしける程に、奥がたはそれまきが来るぞ、髪をくひ切りしぞと申しければ、誠に髪をくひ切りて有り。奥方の目には形見へて余人の目には見えず。不思議の余りマキが部屋へなにとなう人を付けて置き見すれど、成程機嫌よく茶などうちの見て居る。いか成る者の仕業とも知らず。奥方は難産にて元禄十一年死去なり。其後妾腹の子息も十歳ばかりにて死去なり。享保二年稲垣八郎左衛門殿子息を養子にせられしが、享保四年の頃自害せられける。今岩田伝右衛門殿二男を養子にせられけるなり。于レ今折節は表座敷戸障子等鳴渡る。人々火を燈し行きてみれば、女の首など有りてにこにこ笑ふ事もあり。棚に鼠のありく様子なるを、



よく見れば人の首にて、棚を伝ひて失ふこともあり。  
斯様の怪しき事ども度々なりと、即松田六兵衛殿相番衆へ語り給ふとなり。

番外

●閑田次筆巻四より 伴蒿蹊『閑田次筆』一八〇六

門人某来話する奇事、烏丸四条に近江屋吉某といふ職人あり、其妹女同街綾小路同職藤某へ嫁したり。まめやかなる女にて、姑の心にはかなひたれども、藤某美色のおもひ人ありて、しひて難をつけてこれを離縁す。女ふかく怨じ嘆きしかど、色にも出さず、親の家に潜みてありけり。藤某にがしは心のまゝに、彼おもひ人をむかへて愛したり。

さるにある時、吉某が妹、知る人のもとへかりそめに来たり、携へたる日傘、また頭にさしたる物を、母の隠居へおくり給はれ、吾はものへ行きてまいらんといふ。其家怪し見て、衣服なども改めず。他へ行給はんはいかにや、まいてあつきに傘をも捨ておはすは、いかにといひしかども、唯此ものら送りましたまはれと、言少くなにて出さりしかば、いふがまゝに、とみに人ももて、しかじかとつげて、かの物どもをもたせやりしが、かしこにてもあやしみて、かたがたへ人をやりて。もとむるに行へ知れず。

日々重なりしかば、官へ訴へて、あまねく布令流し給ひしかども、其死骸だにもしられず。さるに其日より、かの藤某の後妻、あやしき病を得たり、腹のうちより物いふものあり。応声虫のごとしといへども、是は声に応ずるはあらで、かなたよりいふなり。こたへざれば胸せまりて苦しきが故に、他人ともいふ間にも、さし置きて腹の裏の答へをす。

彼の行方なき女の三年の仏事をせし時、藤某おもひがけず、吉某がかたへ商の筋をいひて来たり、後妻が病三年に及べりとかたる。此藤某もまた意正しからず、されば離れし妻の家へ、かくさしもなきことにて来たり、三年の法事の時なりもあやし、吉某に来たりて、彼あき物見たうべといひしに、こゝろよからねど、せんかたなく一兩日を経ていたりしが、いかにも後妻は病に悩れてありしとなり。医薬祈禱手を尽くせども験なし。こゝに其辺に何某といふ神道を行ふ人あり、奇特ありときて、乞ひて彼病人をかしこへ通はしめ、十七箇日祈禱を乞。

其時此話せる人も、此神道者にしたしければ、行きて見たるに、香炉を携へ出て、何やらん香を炊く、其煙に手を覆へば、起きてもこのごとし。

さて口はしりて、かく責めらるゝは苦しけれど、此体は去らじといふ。かくて終に験みえねば、神道者も辞したり。

其後いくほどなく死せるが、死体全く紫色になりて腐りたりとぞ。

さて藤某も実の狂乱になりて、せんかたなく檻をかまへて入れ置き、家も大に衰へたり。されども藤某にがしは今も死にもせず、あさましきこと、いはんかたなしとなん。

